

# 日向路古代への旅

岩田正城

(会員・佐伯市柏江区)

去る五月二十六、二十七日の両日にわたって行われた史談会の日向旅行は、私にとってはまたとない出会いに恵まれた仕合わせな旅だった。

実のところ、同じ月に人吉・福岡と幾つもの旅行が重なったので、この旅行をどうしたものかとあれこれ迷ったが、思い切って参加することにした。

当日は参加者十四名。予定どおり午前九時、佐伯を出発して一路宮崎へ向った。

十一時過ぎ、宮崎市郊外のレストランで昼食をとる。いつものように案内役は軸丸さん。行届いた案内で定評



のある軸丸さんのこと。そこには既に、かつての軸丸さんの戦友であったという曽我さんという方が待っていてくれた。もちろん、今

日の案内役をして下さるためである。

私達は食事を終えると、そのご厚意に感謝しながら、曽我さんの先導で最初の目的地清武町へ向った。

宮崎市から約三十分で清武町船引神社に着いた。

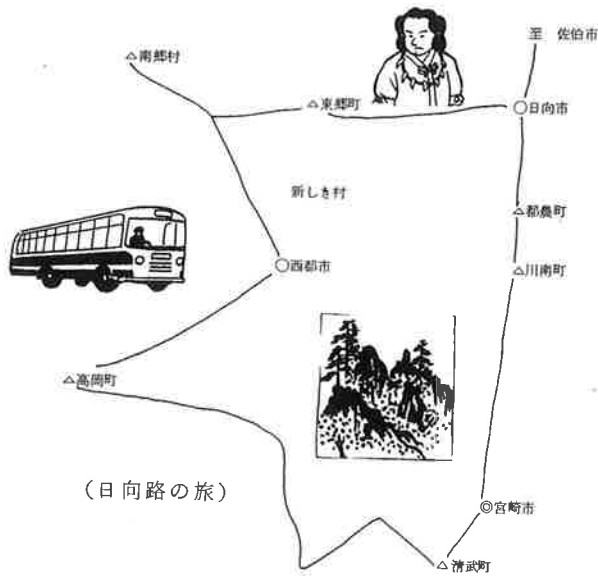
資料によれば、寛治元年(一〇八七)、宇佐八幡を勧請したとある。樹齡九百年の楠の大本があって、その木の空洞には、畳八枚が敷けるということだった。また、境内には、全面的に珍しいヤツユ草という薬草も自生していた。

午後二時四十分、同地を出発。再び曽我さんの先導で高岡町を経て西都市へ向う。

西都市に入り、都萬神社に着いたのは、午後三時四十分だった。

社は、平地のやや高い所にあつて、境内は広がった。社務所で神社案内記をもらう。祭神は大山祇神の娘・木花開耶姫命とある。神社の下の広場には土俵が設けられていて、高校生らしい若者が十名ばかりいた。多分、角力の稽古を始めるのだろうと思つた。

ここにも、船引神社の楠にも劣らぬような楠の大本が



あつて、昔は、その空洞が浮浪者のねぐらになっていた  
 そうだ。

参拝を済ませ、午後四時二十分、ここまで案内してく  
 れた曾我さんと別れ、ここから案内をしてくれる染矢さ  
 んの妹さんの先導で、次の目的地に向って出発した。

しばらく走っていた車は、やがて左折し、ちょっとし  
 た峠道を越えると、広い道に出た。

ここで、染矢さんの妹さんと別れた。それにしても二  
 人の宮崎の方の親切な案内を受け、本当にありがたいこ  
 とだと、改めて旅先での人の情けが身にしみた。

この道を真っ直ぐ行けば、川南を経て都農へ行くのだ  
 ろうが、車は左へ折れて南郷村へ向った。

この山道は県道らしいが、山峡の葛折りの道は大きな  
 車には無理だった。右は深い溪谷だし、左は切り立った  
 断崖が突き出て、その間を車はすれすれに通過する。私  
 達もひやひやしたが、運転にはさぞ神経を使ったことだ  
 ろう。あとで聞いたところによると、この山道は小屋町  
 峠ということだった。

漸く視界が開け、車は展望台のある場所に出た。待っ  
 ていたように皆車から降りた。立札が立っていた。近づ

いてみると、「新しき村展望台」とあった。

「ああ、ここが、あの武者小路実篤さんが、自由と平等の理想に燃えて建てた、日向新しき村だったのか」

と、感慨深く遠景に見入った。

新しき村は、大正七年に木城町石河内の小丸川（おまがわ）右岸に創設された村である。

ひところは五十人を超える入村者があって、順調な発展をみせていたが、ダム建設で村の一部が水没し、大部分の人は、埼玉県毛呂山（もろやま）町へ移住したという。

眼下には、小丸川のダムが、川のせせらぎもよどみもみんな呑み込んで静かに水をたたえていたが、この水の底に、去って行った人々の耕作地や住居が沈んでいると、思うと、ひとりでに胸迫るものがあった。

現在は、かつての実篤夫人の房子さん（九十六歳）と二組の夫婦の方と五人で、自給自足の共同生活を営んでいるそうである。水没を免れたような台地に、その居住区が望見できた。

その方々も、武者小路先生のもした理想の灯を守って、いこうと努力されているのだろう。

昨年十一月の新聞に

古希を迎え 日向新しき村 様々な催し

の見出しで、七十周年を迎えた新しき村の一連の記事が掲載されていた。

午後五時五分、展望台を出発して、ダム沿いに車は道を下った。途中に石河内公民館があった。広く、この辺りを石河内というのだろう。

やがて、車は日向と人吉を結ぶ国道四四六号線に出て左へ進み、午後六時二十分、南郷村神門（みかど）に着いた。西都から二時間の行程だった。

みんな元気で旅館の前に降り立った。入口の右側に、竹の枝を太く束ねたものが三束立ててあった。みんな何だろうといぶかった。誰かが（茶釜だ）と言った。（成程。茶釜になぞらえたものか）と納得がいった。

玄関に入ると、三人の女の人が出迎え、折り目正しい作法であいさつをした。あれもこれも「みやび」を忘れぬおくゆかしさ。気配りの行届いたもてなしに、私達は山あいにいることさえ忘れてしまった。

上って内部を見る。旅館というより大きな住宅のような感じがする。しかし、古びたというよりどの部屋も木

の香も新しく、それに明るかった。

染矢さん・軸丸さんと一緒に部屋に入った。テーブルの上に、お客の書く旅日記のノートがあった。手に取って見ると、中に興味のあるものがあつたが、後で見るところにする。入浴したいと思つたが、浴室には、小さな木造りの浴槽が一つあるだけと聞いていたので敬遠した。

やがて宴会になつた。総勢十四人の小じんまりとした宴席だつた。着席した皆の中に、見知らぬ人が一人いた。聞けば、軸丸さんと交友のある方で、当南郷村の文化協会会長の土田先生という方だつた。軸丸さんの配慮で、当地の歴史の話や文化財見学のご指導をして下さるためわざわざご足労下さつたとのことであつた。

お話によると、我が国の斉明天皇の御代（六六〇）に戦いに破れた百濟（くだら）の王族が、この南郷の地に移り住んだという。それに関する伝説は村内の各地にあり、御門（みかど）神社の祭神はその王で、社宝の二十四面の銅鏡も、その王の遺品という。また、南郷村は今百濟の里として売り出そうとしており、西の正倉院として、奈良の正倉院と全く同じものを建てようとする計画もあるそうだ。土田先生の名刺にも、役場の観光係の職

員の名刺にも、「古代史の謎とロマン 百濟の里南郷村」と、同じ赤文字の刷り込みがあつた。この南郷村も、他の市町村と同じように、村を挙げて観光宣伝に努めているとのことだつた。

また、盆の十六日には、「いだごろ踊り」という供養踊りが、村中で催されるそうである。

その踊りは、川魚の「いだ」を捕る時の所作を振り付けたもので、その音頭は「お為半蔵」の音頭を使つているという。意外な事を聞いて私は驚いた。佐伯を遠く離れた山里のこの南郷で、「お為半蔵」の話を聞くなど、夢にも思わぬ事だつた。先生もまた、私が「お為半蔵」の所の者だと知つて、いたく驚かれた様子だつた。

先生は、常々お為半蔵の比翼塚を訪れてみたいと願つているそうで、私もその熱意に感じ入り、

「もし、佐伯に来られたら、喜んでご案内しましょう」と申しあげた。

なおも話が進むうち、「兵庫節」という踊りもあると聞き、重ね重ね驚き、

「その踊りは私の方にもありますよ」

と言うと、土田先生もいよいよ驚いて、

「そりゃあ、兄弟ではないか」

と、テール越しに手を差しのべられた。私も手を出して、堅い握手を交わした。

思うに、お為半蔵の音頭は、ひとり南郷のみでなく、日向の各地に広がっているに違いない。かつて日向の市長さんも、何かのついでに柏江に来られ、お為の屋敷跡を尋ねられたことがあった。

このようにお為半蔵の音頭が日向まで広がったのは、この地に入り込んだ佐伯山師によるものだろうか、一行の中にもそんな声が出た。

こうして、感激のうちに宴も果て、部屋へ帰った。今日の予定は全て終わった。ゆったりとした気持ちで、見たいと思っていた旅日記を手にした。それは、鹿児島県川内市の方の書かれた、当地に関する昔の物語だった。

天正の昔、島津軍に敗れた伊東義祐が、大友氏を頼って豊後に落ちて行く途中、この地の奈須党に温く遇された話であった。

また、西南の役で、官軍に追われ、鹿児島へ敗退の西郷が、この地に留まった時の模様など、地名まで明らかにして書かれていた。その中に、次のような哀話もあった。

た。

この南郷旅館のある西の町外れに、小丸川をはさんで田んぼがあり、山際の「川上迫」には薩軍の無名兵士の墓があるが、その墓についての話である。

山の上で見張りをしている取り残された、薩軍の三人の兵士がいた。三人ともまだ若い十七、八の少年で、村の人からも可愛がられ、握りめしなどももらっていた。同年配の村の娘達から冷かされると、顔を赤らめる程純情な若者であった。

ある日、官軍がやってきたので、村人は三人を隠居家にかくしたが、水飲みに出た所を官軍に見つけられ、斬殺されてしまった。その時の三人の悲鳴がいじらしくかったと、当時を知るおばあさん達が話していたそうなのと書いてあった。

哀れを誘う話であるが、その「川上迫」という村の人の話も聞いてみたいものである。

翌朝午前八時出発。旅館を出てすぐ近くの御門神社参拜。土田先生のお世話で、神社の宝物二十四面の銅鏡や馬鈴・馬鐙等の説明を聞きながら拝観した。これだけ貴重な銅鏡が揃っているのは、やはり、百濟から亡命した

王の遺品なのであろう。

参拝を終えて車の近くに帰ったら

「私は足が悪いので、すぐその役場に行って、資料をもらってくださいませんか」

と、土田先生に言われたので、会長さん・高宮さんと一緒に役場へ行き、全員の資料をもらってきた。

御門を出発してから、二十分ぐらいで東郷村坪谷に着き、若山牧水の生家と、すぐ横にある記念館の見学を済ませ、日向市に向う。

日向市内で土田先生と別れ、私達は太平洋ドライブインで昼食。小憩の後、美々津海岸にある日向市歴史民俗資料館を見学し、午後二時同地を出発。全ての日程を終えて佐伯への帰路へついた。午後四時二十分、満ち足りた気持ちで、つつがなく二日間の旅を終え、散会した。



▲ 歴史資料館

▼ 御門神社にて

